岩手県立中央病院

安全に栄養剤を投与するため ロック接続機能付き栄養セットを導

経管栄養による栄養剤投与時に注意を要することは、経鼻栄養チューブの誤挿入・誤抜去だけではない。 岩手県立中央病院では、栄養剤と栄養セットの接続面に着目し、負荷が加わってもはずれることのないよう。 ロック接続機能の付いた栄養セット(栄養剤と経鼻栄養チューブなどをつなぐライン)を採用した. 導入により、栄養剤投与の手技を安全面から確認するきっかけになったという。 そこで今回. 導入の実際についてうかがった.(編集部)

取材にご協力いただいた方



NSTチェアマン/消化器外科医長 中野 達也氏



医療安全管理部/上席医療安全管理専門員 (看護師) 高橋 弥栄子さん



栄養管理室/NST専従・管理栄養士 伊藤 美穂子さん

医療安全管理部と 栄養管理室、NSTが導入を推進

県立の中枢医療機関として地域住民 に親しまれる岩手県立中央病院では. 2010年4月にロック接続機能の付い た栄養セット(図1)を導入することと なった.

「これまで使用しているものと価格 も変わらず、安全機能が付加されたと いうことで採用しました |と話すのは. 上席医療安全管理専門員で看護師の高 橋弥栄子さん.

早速. 医療安全管理部から知らせを 受けた栄養管理室のNSTメンバーが この栄養セットを確認したところ。こ れまで使用していた栄養剤の接続口で はロック接続できないことが判明した。

「ロックできるという新たな安全機 能を活用したいと思ったので、接続口 がロック接続できる栄養剤を探しまし た. また. 確実に安全機能を働かせる ため主に作業を行う看護師全員が確実 に接続できることを確認することが必 要だと考えました |と話すのは、NST 専従・管理栄養士である伊藤美穂子さ 2

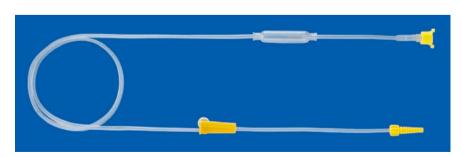


図 1 ロック接続機能付き栄養セット

表 1 岩手県立中央病院での ロック接続機能付き栄養セット 導入のながれ

2010年3月中旬

- ・メーカーからの提案を受けて栄養 管理室と医療安全管理部で検討
- ・栄養科とNSTで栄養セットの規格 サイズに合う栄養剤の検討
- ・診療部への確認

4月中旬 採用決定

- ・全職種を集めたセーフティーマネ ジメント部会で2週にわたって説 明会を実施
- ・NSTでシミュレーション型の説明 会を実施

接続口が合う栄養剤を探すにあたり、これまで使用していたものと似た組成の栄養剤について神経内科・脳神経外科・消化器外科の医師に確認をとり、採用を決めた。年度初めだったこともあり、導入まで約3週間とスムーズに移行できたという(表1).

これまでの栄養セットの場合、栄養 剤と栄養セットの接続が緩く、栄養剤 の液漏れが生じたり、不意な力が加わ ったときに接続がはずれて栄養剤がこ ばれる可能性があった(表2). 同院で は実際に起きてはいなかったが、ロッ ク接続できる(図2)栄養セットを導入 することで、これらのリスクを回避で きることもあり、導入の運びとなった.

決定事項を全職種のセーフティーマネジャー40人前後を集めた部会で知らせ、NSTチェアマンの中野達也氏が中心となってNSTメンバー(表3)の病棟看護師に使用法を解説。院内への普及を促した。

表2 ロック機能付き栄養セットを使用するメリット(従来品との比較)

従来の栄養セット

ロック機能付き栄養セット

1. 栄養セット接続手技の標準化が困難

接続が弱いと脱落リスクが高くなるが、どこまで 挿入すればいいのかわからない

- ⇒挿入の程度は感覚的であり、マニュアルを作成 しても作業者によるバラツキあり
- 2. 栄養セット脱落によって病棟業務に余計な負担 ボトルやRTHによる投与中には、患者が引っ張る、 栄養セットを引っかけるなど栄養セット脱落のリ スクを伴う
- ⇒ベッドや床に栄養剤がこぼれると、掃除などの 余計な負担が増える

- ・ロックを確認し、接続完了 とすることで接続手技の標
- ・作業者によるバラツキはない
- ・不意に抜けない

準化が可能

・清掃など余計な手間の心配がなく、ストレス軽減になる







ロック接続のため不意な力がかかってもはずれることがない

図2 ロック接続機能付き栄養セットと栄養ボトルの接続方法

「各病棟で説明するとき、言葉だけでは伝わりにくいので、実際に一人ひとりに実物に触れて体験してもらいました」と伊藤さん、導入前に実際に接続方法のシミュレーションを実施したことで、スムーズに導入ができた。

また、"しっかりロックされているか確認することが大切"と記した導入のお知らせを、医療安全管理部から各病棟に配り、掲示(図3)、セーフティー

マネジメント部会とNSTが院内に伝達 したところ、看護師は自然と、ロック の接続口を確認するようになったという.

「これまでの栄養セットでは接続手 技が統一されていなかったので、どこ まで挿入していたのか、しっかり奥ま で挿入されていたのか不明確でした」 と伊藤さんは話す、今回導入したロッ ク接続機能付き栄養セットにより、栄

表3 岩手県立中央病院のNSTメンバー構成と活動内容

NSTメンバー

消化器外科医師,総合内 科医師を中心に,歯科医師,看護師長,皮膚・排 泄ケア認定看護師,各病 棟看護師,外来看護師,管理栄養士,薬剤師,言 語聴覚士,臨床検査技師,歯科衛生士,事務職員, 計36人で構成

活動

毎週木曜日にカンファレンス実施後, ラウンド 経管栄養の対応:

- ●神経内科と脳神経外科=トラブル時に呼び出しを 受けて対応
- ●消化器外科,心臓血管外科,循環器科,呼吸科=経管栄養導入開始時に,①アセスメント,②製品選択,③投与量・投与速度のスケジュールをプランニングして提示,④主治医が確認し提案書を指示書に変更、⑤栄養投与実施、⑥検証

※経鼻栄養を利用する患者数:全病棟合わせて1日20~30人(ICUでは中心静脈カテーテルとの併用で 1日3~5人)

胃瘻・腸瘻を実施する患者数:消化器外科の患者を中心に1日2~3人

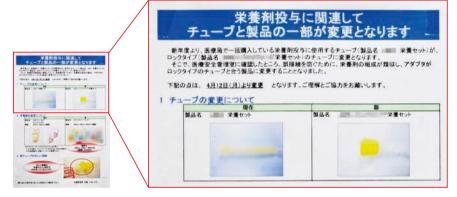


図3 導入のお知らせを掲示

養剤との接続手技が統一でき、患者への栄養剤投与時の一連の手順(図4)のなかに、新たな接続の安全確認という視点が追加されたことは大きなメリットだという.

器具の導入が 安全意識を高める

同院では、経管栄養患者の多い神経 内科と脳神経外科を除く4科(消化器 外科,心臓血管外科,循環器科,呼吸器科)の患者が経管栄養を導入する場合,NSTがアセスメントし製品や投与量・投与速度などをプランニングして主治医に提案している.

「プランニングで重要なことは、ラインの太さや種類といった器材の選定以外に、バイタルサインやポジショニング、サクションの回数やラインの状態、皮膚トラブルといった患者さんの状態をアセスメントすることです、そ

して、日々のケア内容を考慮して総合的に判断しなければなりません。栄養面だけにこだわると、トラブル時に原因を見逃すことになりかねません」と伊藤さんは話す。

リスクを抱えながら業務を行っている以上,可能なかぎりリスクを減らし, 院内全体で協力して安全な環境を整えることが大切だという.

「スタッフの人数が多いため、何度 も繰り返し説明を行う手間は否めませ んが"スタッフ全員がリスクを共有し ている"という意識で管理システムを 整え、地道な対策を行うことが大切で す」と伊藤さんは強調する。

一方, さまざまな栄養剤を取り寄せてわかったのは,各社とも栄養セットとの接続口の規格が異なることだった. 現段階では,ロック接続機能付きの栄養セットと合う規格の栄養剤はかぎられている.

「もっとロック接続ができる栄養剤が増えると、患者さんにあった栄養剤を検討できると思います」と、伊藤さんは選択肢がひろがることを期待している。

同院では、経腸栄養実施例のインシデントが多い経鼻栄養チューブの誤抜去事例を0にする取り組みを積極的に行っている。多くは患者による自己抜去であるため、①医師がそのつど挿入する、②経口投与をすすめるため、経口訓練を積極的に行う、③栄養剤注入時のみミトンを装着する、④日中、患者が気分転換できるよう家族に患者のそばに寄り添ってもらう。などの防止



ナースステーションで患者の名前と栄 養剤を確認し、栄養剤にロック接続機 能付きの栄養セットを接続する



栄養セット内に栄養剤を充填さ



投与前に患者を確認する(名乗 ってもらう, またはネームバン ドなどで確認). その後, 患者 の胃内注入音を聴取し、胃内容 物の吸引をして誤挿入・誤留置 防止のための確認をする



上体挙上(30°以上)し、 栄養セットと患者の経鼻 栄養チューブを清潔な状 態で接続する. 指示に準 じて投与速度を調節し注 入を開始する



栄養剤投与後に水分投 与(薬剤投与)を行う

図4 経鼻栄養患者への栄養剤投与の手順

策を実施している. しかし. 患者の不 快感が根底にある以上、0にすること は難しいという.

「経鼻栄養チューブを使用する場合、 誤挿入や注入中の誤抜去ばかりに意識 が傾き、栄養セットと栄養剤との接続

トラブルの可能性があることに目がい きませんでした. 今回のロック接続機 能付き栄養セットの導入と、それに伴 う栄養剤の変更で、栄養セットと栄養 剤との接続にも注意するようになり, より医療安全の意識が高まったと感じ

ています」と高橋さんは話す.

今後、ロック接続機能付き栄養セッ トに適用する栄養剤が充実するととも に. 医療安全文化がより醸成すること に期待を寄せている.